群教セ	G05 － 07
	平23.243集

発想や構想する力を高める図画工作科指導の工夫

―「グローアップチャート『みっけタネ』」と「図画工作科ノート」の活用を通して―

長期研修員　　新島　英幸

《研究の概要》

本研究は、図画工作科「Ａ表現」において、形や色をとらえイメージをもつ〔共通事項〕を意識して対象とかかわり、発想や構想する力を高める表現指導を目指したものである。具体的には、発想や構想の視点やプロセスを示す「グローアップチャート『みっけタネ』」と、試し活動をしながら自分のイメージを膨らませたり、練り上げたりする「図画工作科ノート」を活用し、感性を働かせながら発想や構想する活動を行った。

キーワード　【図画工作　〔共通事項〕　発想　構想　みっけタネ　図画工作科ノート】

Ⅰ　主題設定の理由

平成20年３月に小学校学習指導要領が改訂され、図画工作科の目標を「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」と定めている。新たに「感性を働かせながら」の文言が追加され、感性を働かせながら、造形的な創造活動の基礎的な能力を培うことを示している。

内容については、今回の改訂で、「Ａ表現」と「Ｂ鑑賞」の二つの領域を支える資質や能力として〔共通事項〕が新設された。〔共通事項〕は「表現及び鑑賞活動の中で、共通に必要とされ、自分の感覚や活動を通して形や色などをとらえること、及び、自分のイメージをもつこと」とし、常に〔共通事項〕を意識しながら対象をとらえ、造形的な創造活動の基礎的な能力を培うことを示している。

国立教育政策研究所の特定の課題に関する調査では、図画工作科の授業改善に向けて「児童が意欲的に表現活動を行うプロセスを通して、児童自身の発想や構想の能力を具体的に発展させる指導の工夫」を提言している。具体的には、発想や構想の手がかりになる視点や方法を提示したり、アイデアスケッチを何枚も描けるようにしたり、表しながら段取りを考え直せるようにしたりすることを例示し、〔共通事項〕は指導の改善における具体的な視点とすることができるとしている。

本県の学校教育の指針においても、学習指導要領の改訂に伴い、「表現や鑑賞の活動場面において、形や色をとらえイメージをもつなど〔共通事項〕で示された資質や能力と学習内容との関連を明確にした指導を充実させましょう」とし、〔共通事項〕を意識して身に付ける資質や能力を明示している。

協力校の児童は、図画工作科の授業にこつこつと取り組み、対象物をよく見て正確に描いたり、つくったりする力は備わっているが、自分らしい発想をすることが苦手な児童が見られる。また、自分のイメージを表現するために、「どのような構成をしたらよいか」「どのような材料が効果的か」など発想を具現化するための構想力にも課題が見られる。形や色をとらえイメージをもつなど、〔共通事項〕を意識し、発想や構想する力を高めていくことは、学習指導要領や国立教育政策研究所、本県の指針に示された課題と一致するものである。

自分らしい表現が苦手な理由として、発想や構想する力を高めるための視点やプロセスが具体的に示されていなかったり、イメージを練り上げる時間や場が十分に確保されていなかったりすることが考えられる。そこで、「グローアップチャート『みっけタネ』」で形や色をとらえイメージをもつなどの発想や構想の視点やプロセスを提示し、「図画工作科ノート」を自分のイメージの練り上げの場とし、感

性を働かせながら対象と向き合い、発想や構想する力を高める図画工作科指導の実践を考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校高学年における図画工作科において、イメージを練り上げる様々な試し活動を通して発想や構想する力を高めるために、「グローアップチャート『みっけタネ』」と「図画工作科ノート」を活用した指導の有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　イメージを膨らませる段階では、「みっけタネ①」で参考作品を鑑賞する視点やプロセスについて、「みっけタネ②」で発想の視点やプロセスについて、形や色を手がかりに理解し、「図画工作科ノート」で自分の思いを形にしたり、色の組合せを考えたり、材料を組み合わせたりするなどの様々な試し活動を行うことで、自分らしい表現を追求しながら発想する力を高められるだろう。

2　イメージを練り上げる段階では、「みっけタネ③」で相互鑑賞で発想を広げる視点やプロセスについて、「みっけタネ④」で発想を具現化する構想の視点やプロセスについて、形や色を手がかりに理解し、「図画工作科ノート」で構図や動き、配色、配置、奥行きなどを組み立てていく様々な試し活動を行うことで、自分らしい表現を追求しながら構想する力を高められるだろう。

Ⅳ　研究の内容

1　発想や構想する力を高めるについて

思いを形にすることが発想である。発想する力を高めるとは、初めに思い描いたイメージに、自分の様々な経験や新たに得た情報などを織り交ぜながら、頭の中やアイデアスケッチなどで自分らしいイメージを膨らませることである。様々な経験とは、今までの造形体験であったり、日常生活ではぐくまれた感性であったり、アイデアスケッチを描いたり材料を並べたりするなどの試し活動で得られたものなどである。新たな情報とは、参考作品や友達の作品から得た情報や、思考の途中で思い付いた気付きなどである。

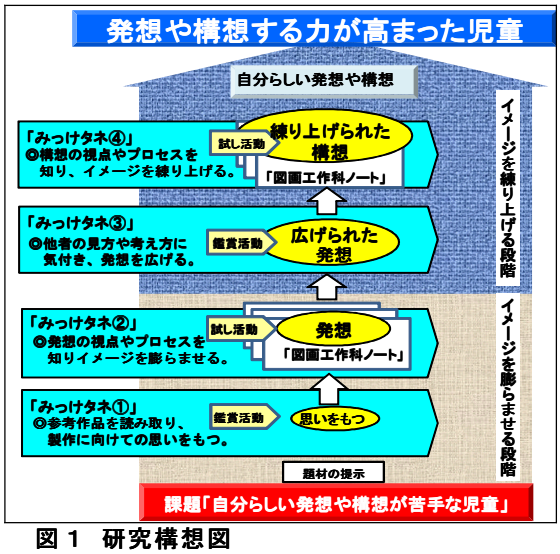


図１　研究構想図

発想を形や色などによって具現化し、より自分の意図する表現に近付ける道筋が構想である。構想する力を高めるとは、その過程で、構成の美しさや目的、用途などと照らし合わせ、頭の中やアイデアスケッチで作品を分解、再構築し、自分らしいイメージを練り上げることである。構成の美しさとは、形がつくりだす動き、色の調子、それらが組み合わされて生まれる変化、響き合う配置、奥行や方向感などである。目的や用途とは、ポスターのように思いを伝える目的や工芸品のように使う用途などであったりする。

2　「グローアップチャート『みっけタネ』」と「図画工作科ノート」の活用について

「グローアップチャート『みっけタネ』」は鑑賞の視点やプロセス、発想や構想の視点やプロセスを示すものである。視点としては、造形的な特徴である形や色を中心として示し、プロセスとしては、活動の流れや方法を示す。鑑賞の場面では、参考作品を形や色から感じ取り、発想や構想の場面では、形や色からイメージを膨らませたり、練り上げたりする。児童は、「グローアップチャート『みっけ

タネ』」の絵図や写真、吹き出しの説明などを見て、海図のように自分で進路を見付けながら、発想や構想する力を自ら高めていく。具体的には、「グローアップチャート『みっけタネ』」を表１のように活用する。

表１　各段階で用いる「グローアップチャート『みっけタネ』」の内容

イメージを膨らませる段階	「みっけタネ①」	形や色を鑑賞の視点として、作品から受けるイメージや作者の表現意図を読み取る。
	「みっけタネ②」	形や色を発想の視点として、自分の思いをイメージし、形や色を使って効果的に表す。
イメージを練り上げる段階	「みっけタネ③」	相互鑑賞で感想を交流し合い、他者の見方や考え方に気付き、発想を広げていく。
	「みっけタネ④」	発想を具現化し、より自分の意図する表現へ近付けるための構想を練り上げる。

「図画工作科ノート」は、様々な試し活動を行う場とするものである。「みっけタネ」で示された視点やプロセスを基に、実際に描いたり描き直したりして、発想を膨らませ、構想を練り上げ、形や色、イメージを確かめながら自分の意図した表現へと近付けていく。また、試し活動を行いながら、随時、製作過程から思考の変化を振り返ったり、積み上げられたアイデアを参考にしながら、「みっけタネ」と「図画工作科ノート」の活用を繰り返し、発想や構想する力を高めていく。「図画工作科ノート」は　図２のように活用する。

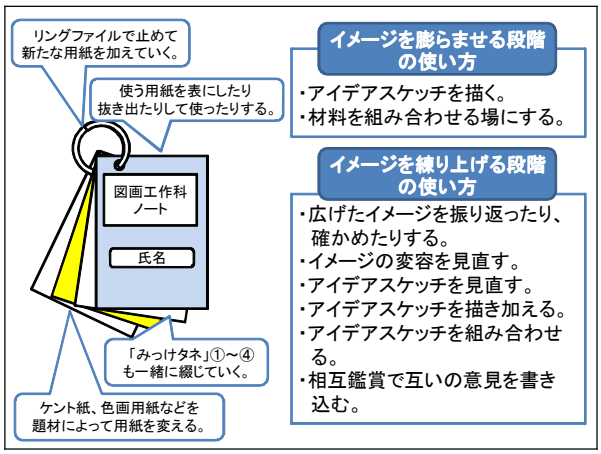


図２　各段階における「図画工作科ノート」の使い方

Ⅴ　研究の計画と方法

１　実施計画

対　象	研究協力校　小学校第５学年　77名　（２クラス）	
期　間	平成23年６月21日～６月28日　４時間	平成23年９月28日～11月２日　10時間
題材名	「気持ちを表す形や色」	「想ぞうのつばさを広げて」

２　抽出児童

A	自分の思いを言葉で伝えたり、絵で表したりすることに苦手意識があるため、白紙のまま時間が過ぎてしまい、なかなか製作が進まないことがある。様々な試し活動を通して、自由に表現する楽しさを味わわせながら、発想や構想する力を高めていきたい。
B	意欲的で描写力も高いが、見たものを忠実に描くことにこだわりすぎ、のびのびとした表現をすることに課題が見られる。様々な試し活動の中で、形や色を通して自分の思いを表現することによって、自分らしさを追求させながら、発想や構想する力を高めていきたい。

３　検証計画

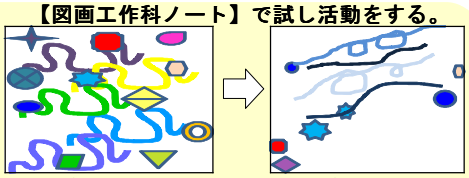
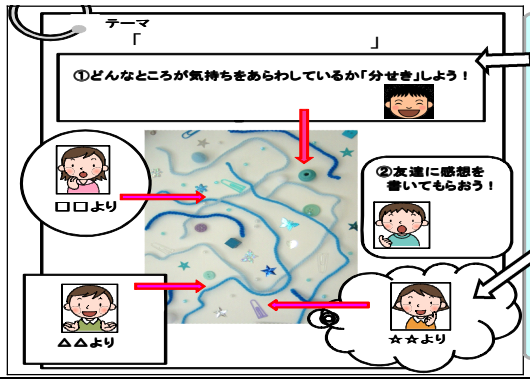
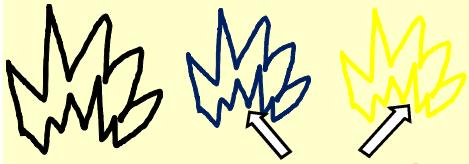
検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し１	イメージを膨らませる段階で、「みっけタネ①」で参考作品を鑑賞する視点やプロセスについて、「みっけタネ②」で発想の視点やプロセスについて、形や色を手がかりに理解し、「図画工作科ノート」で自分の思いを形にしたり、色の組合せを考えたり、材料を組み合わせたりするなどの様々な試し活動を行うことは、自分らしい表現を追求しながら発想する力を高めるのに有効であったか。	○観察、つぶやき、発言、ビデオ、「みっけタネ」の記述、「図画工作科ノート」、アンケート
見通し２	イメージを練り上げる段階で、「みっけタネ③」で相互鑑賞で発想を広げる視点やプロセスについて、「みっけタネ④」で発想を具現化する構想の視点やプロセスについて形や色を手がかりに理解し、「図画工作科ノート」で構図や動き、配色、配置、奥行きなどを組み立てていくなどの様々な試し活動を行うことは、自分らしい表現を追求しながら構想する力を高めるのに有効であったか。	○観察、つぶやき、ビデオ、「みっけタネ」の記述、「図画工作科ノート」、アンケート

４　指導計画

(1)　実践１

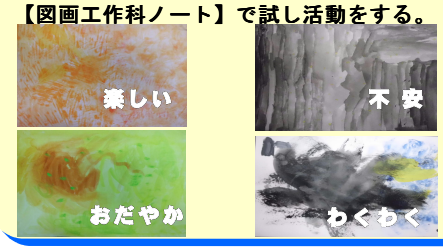
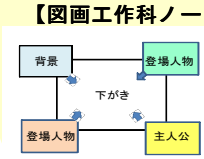
対　　象	研究協力校　小学校第５学年　77名　（２クラス）
実践期間	平成23年６月21日～６月28日　４時間
題 材 名	「気持ちを表す形や色」

目標	様々な「気持ちや感じ、雰囲気」を形や色で表すことを試み、材料や用具の使い方を工夫しながら自分の方法で描く。
評価規準	関 言葉ではなく、形や色で「気持ちや感じ、雰囲気」を表すことに興味をもって取り組もうとしている。 想 「気持ちや感じ、雰囲気」が表せるように、形や色をいろいろ試したり表し方を考えたりしている。 技 「気持ちや感じ、雰囲気」に合わせて線の形や色などを考え、試行錯誤しながら表し方を工夫している。 鑑 自他の作品を見て、表された「気持ちや感じ、雰囲気」を想像し、お互いのよさを感じ取っている。

過程	時間	主な学習活動	研究の手だて（「みっけタネ」と「図画工作科ノート」の活用）
イメージを膨らませる段階	20分	1　形や色だけで「気持ちや感じ、雰囲気」を表すことができることを知る。 ○参考作品を見て、どんな「気持ちや感じ、雰囲気」が表されているか考える。 ○理由を考えながら、感じたことを発表する。 ○形や色に着目することを確認し、いろいろな感じ方に気付く。 ○「みっけタネ」の空欄に入る言葉を考える。	 **【「みっけタネ①」】** ・形や色に視点を当てる。 ・鑑賞のプロセスを示す。 ⇩ ・作品から受ける気持ちを感じ取る（「楽しい」、「喜び」、「悩み」等）。
	70分	2　本時の学習課題を知る。 **学習課題　いろいろな「気持ちや感じ、雰囲気」を、形や色で表してみよう。** ○表したい「気持ちや感じ、雰囲気」を表す。 ○「図画工作科ノート」に毛糸やビーズなどの材料を並べたり並べ替えたりし、いろいろな試し活動をする。 ○イメージを表した作品をデジタルカメラで記録しておく。	**【図画工作科ノート】で試し活動をする。**  【イメージとかけ離れた表現】　【イメージに近付いた表現】 **【「みっけタネ②」】** ・形や色の配置や組合せの効果を示す。 ・発想のプロセスを示す。
イメージを練り上げる段階	25分	3　前時の学習を振り返り、自他の作品を鑑賞する。 ○気持ちが表せた理由を分析する。 ○前時に製作した作品を写した写真を、「図画工作科ノート」に貼り付け、自分の作品を分析して分かったことを写真の周りに書き込み、「気持ちや感じ、雰囲気」を表しているところを矢印で結ぶ。 ○相互鑑賞を行い、友達の「図画工作科ノート」に感想を書き込む。その際、感じた部分を矢印で示す。	 **【「みっけタネ③」】** ・自己分析のプロセスを示す。「楽しい気持ち」が表せたのはなぜだろう？ ⇩ ・友達の考えも聞く。 ⇩ ・意図した表現ができる。
	65分	4　本時の学習課題を知る。 **学習課題　テーマをもとに、自分の「気持ちや感じ、雰囲気」を、形や色で表そう。** ○「みっけタネ」を参考にし、表したい「気持ちや感じ、雰囲気」を表現する。 ○毛糸や折り紙の代わりに、自分らしさを表した形や色を絵の具で描く。 ○試し活動を繰り返し、自分らしい表現の幅を広げていく。 5　友達の作品を鑑賞し、作品が表している「気持ちや感じ、雰囲気」を想像することを楽しむ。	**【図画工作科ノート】で試し活動をする。**  【勢いのある形】　【どっち色が喜びに近い色？】 **【「みっけタネ④」】** ・形や色の配置や組合せの効果を示す。 ⇩ ・構想のプロセスを示す。 ⇩ ・テーマに合っているか確認する。

(2)　実践２

対　　象	研究協力校　第５学年　77名　（２クラス）
実践期間	平成23年９月27日～11月２日　９時間
題 材 名	「想ぞうのつばさを広げて」
目標	物語の中で、心ひかれた場面の様子や登場人物の気持ち、雰囲気などがよく表れるように、構図や色の使い方を工夫して絵に表す。
評価規準	関 心をひかれた場面を絵に表すことに取り組もうとしている。 想 心をひかれた場面の場所の様子や、登場人物の気持ちなどを想像し、どのように表そうか考えている。 技 場面の様子や雰囲気が表れるように、画面の組立てや色などを工夫している。 鑑 友人と絵を見せ合い、想像した場面の様子や雰囲気をどのように工夫したか感じ取っている。

過程	時間	主な学習活動	研究の手だて（「みっけタネ」と「図画工作科ノート」の活用）
イメージを膨らませる段階	20分	1　参考作品を読み取る。 ○４枚の「銀河鉄道の夜」の参考作品を見て「楽しい」「寂しい」「やさしい」など、形や色などの〔共通事項〕を視点として心情や雰囲気を読み取り、「みっけタネ」に記入する。 ○「いつ」、「どこで」、「何が」、「どうして」、「どうなった」など焦点化しやすい文で、作品の説明文を簡潔に書き、読み取りを深める。	【参考作品Ａ】明るく輝く色が楽しそう 【参考作品Ｂ】迫る汽車が力強い 【参考作品Ｃ】暗い色が不安な感じ 【参考作品Ｄ】遠くの汽車が寂しそう **同じ物語なのになぜ、感じ方が違うの？** ⇩ **形や色で感じ方が違うことに気付く。** **【「みっけタネ①」】** ・形や色に視点を当てる。 ・鑑賞のプロセスを示す。 ⇩ ・作品から受ける気持ちを感じ取る（「楽しい」、「喜び」、「悩み」等）。
	25分	2　学習課題を知る。 **学習課題　感動した場面を、登場人物の気持ちや物語の雰囲気などがよく表れるように、人物や風景の置き方や色の使い方を工夫して絵に表そう。** ○「感動した場面」、「登場人物の気持ち」、「物語の雰囲気」をつかみ、表したい場面を考え、主題をつかむ。 ・「いつ、どこで、何が、どうした」など焦点化した、場面の説明文を書く。 ・表現に結び付くような言葉に下線を引き、場面構成のときに役立てる。	**【表したい場面を説明した文】** 深い森で、楽しそうに幻燈を見ている四郎とかん子。紳三郎は燕尾服を着て木に掛けられたスクリーンの前で司会をしている。広場には月あかりが幻想的に差し込んでいる。 **【「みっけタネ②」】** ・心情を生かした主題を決める。 ⇩ ・場面を説明する文を書く。 ⇩ ・表現のヒントを見付ける（下線部）。 ⇩
	30分	3　主題を基に背景を考える。 ○下地をつくる。 ○主題からイメージした主張色を考え、「図画工作科ノート」で試し活動を繰り返しながら自分の思い描くイメージに近付けていく。その際、絵の具を塗りつぶしたり重ねたり、滲ませたり垂らしたりするなど様々な表現を試行する。	**【図画工作科ノート】で試し活動をする。**  ・主張色で気持ちを表す視点を示す。 ・発想のプロセスを示す。 ⇩ ・効果的な技法を見付ける。
	15分 45分	4　登場人物を整理する。 ○登場人物や物語の構成に必要なものを考えアイデアスケッチをする。 ○主題説明文のアンダーラインに着目し、登場人物の心情や動き、役割に重点をおき、一つ一つスケッチしながら形づくっていく。	**【図画工作科ノート】に画面を構成するものを描く。** **〈主題のアンダーラインに着目して描く〉** ・興味深そうに指さしている四郎 ・不安そうなかん子 ・燕尾服を着て司会をする紳三郎 ・木に掛けられたスクリーン
イメージ練り上げる段階	25分	5　途中の鑑賞会をする。 ○「みっけタネ」を使い鑑賞の視点を確認しながら相互鑑賞し、感想を交流し合う。 ○感想を付箋紙に書いて友達のアイデアスケッチに貼る。 ○意見を交流しながらいろいろな考えに触れ、見方や考え方を広げる。	**【図画工作科ノート】で相互鑑賞をする。** アイデアスケッチ 付箋紙 **【「みっけタネ③」】** ・鑑賞の視点を確認する。 ⇩ ・相互鑑賞で見方や考え方を広げる。
	65分	6　画面構成を考える。 ○アイデアスケッチを組み合わせて、並べたり並べ直したり、トリミングしたり重ねたりして構成を考える。 ・鑑賞会で得た情報を基に、アイデアスケッチを練り直す。	**【図画工作科ノート】で試し活動をする。**  **【「みっけタネ④」】** ・「配色」、「配置」、「重なり」、「奥行き」などの構想の視点を示す。
	160分	7　製作する。 ○「図画工作科ノート」を参考に、心情や雰囲気が表れているか確認しながら画面構成し、下描きをする。 ○心情や動きを損なわないように、イメージに適した背景を彩色する。 ○心情や動き、背景とのバランスを見ながら、登場人物や画面を構成するものを彩色する。 ○登場人物と背景を比較しながら、登場人物の位置、近景から遠景までの流れ、配色のバランスなどに気を付け、細部まで描き込む。 ○背景などの細かい部分については、極細のネームペンなどを使って描き込む。	
	20分	8　鑑賞会をする。 ○友達の作品を鑑賞し、作品が表している物語を想像することを楽しむ。	

Ⅵ　研究の結果と考察

1　イメージを膨らませる段階での「グローアップチャート『みっけタネ』」と「図画工作科ノート」を取り入れた活動の有効性について

(1)　結果

①　実践１　題材「気持ちを表す形や色」

導入として参考作品（図３）を示して、感じる気持ちを問いかけた。児童からは、ギザギザの形や赤い色からは、「怒り」という意見が出たり、黄色からは、「楽しい」という意見が出たりした。また、雲の形からは「悩んでいる」という意見が出た。出された意見は板書して、共通点や相違点を見付けた。すべての児童が、視点や思考の流れを「みっけタネ①」で確認しながら活動することができていた。

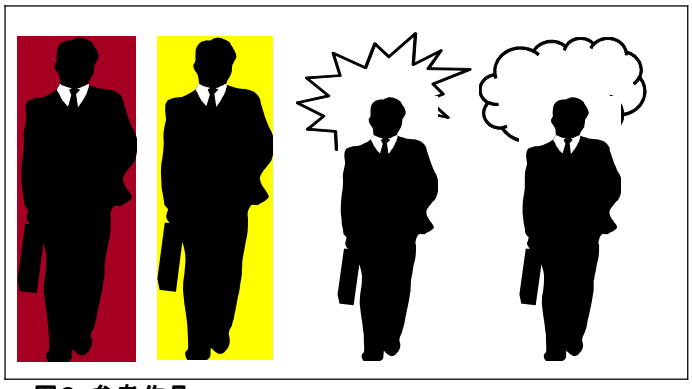


図３ 参考作品

形や色で気持ちを表せることを理解した後に、各自がいろいろな気持ちを表す活動に取り組んだ。簡単に試し活動ができるように、様々な形や色の毛糸やビーズなどを用意し、「みっけタネ②」を参考に「図画工作科ノート」に並べたり、並べ直したりした（図４）。児童は、試し活動から複数のイメージをもち用意した材料で表すことができていた。表したイメージは各自がデジタルカメラを用いて記録した。

【うれしいイメージ】　　【製作の様子】

図４　毛糸やビーズを用いた表現

抽出児童Ａは、「みっけタネ」に提示してある参考作品の形や色をとらえて気持ちを感じ取り、教師の問いかけにも的確に答えることができた。その後、毛糸やビーズなどの材料を用意し、「図画工作科ノート」に並べた。机に置いた「みっけタネ」を見ながら材料を並べるが、なかなか納得のいく表現ができず、始めに思いついた表現からさらに広げていくには至らなかった。しかし、いろいろ試しながら表現方法を見付けようとした経験は、その後の構想に生かされていた。

抽出児童Ｂは、「みっけタネ」に提示してある参考作品から気持ちを感じ取る場面では、誰よりも意欲的に発言できていた。材料を並べて気持ちを表現するときも、「爽やかな気持ち」を表そうとすぐに製作を始めたが、「爽やか＝自然」と発想し何回も並べ直してみるが、どうしても木の形にとらわれてしまっていた。しかし、友達の作品と見比べながら試行錯誤するうちに、具体物を介することなく、イメージを直接形や色で表すきっかけがつかめてきた。

②　実践２　題材「想ぞうのつばさを広げて」

導入では、「銀河鉄道の夜」を描いた児童作品４枚を鑑賞し、「みっけタネ①」を参考に主人公の気持ちや作品の雰囲気を比べた。児童は、すぐに形や色を視点に鑑賞することに気付き、暗い中の明るい色調から「楽しさ」を感じたり、モノトーンや暗い色調からは、「寂しさ」や「悲しさ」を感じたりしていた。この活動から、物語絵でも「気持ち」や「感じ」、「雰囲気」を形や色で感じたり、表したりできることに気付くことができていた。

その後、「みっけタネ②」を使い、イメージを具体化するため、場面を説明する文を書いた。

この文を読み返し、登場人物の心情や場面様子を表す部分に線を引き、「楽しさを表した絵」「不思議な雰囲気の絵」など、各自が心情や感じを表すものを主題として設定した。主題を基にして、「図画工作科ノート」に主張色で思いついたイメージを表した（図５）。その際、必要に応じ、モダンテクニクを使った参考作品を用意した。児童は、雪は白いといった見た目の色にとらわれず、一人一人がイメージに合った色を出そうと、絵の具を滲ませたり、重ねたりしながら彩色し、背景のアイデアを複数描くことができていた。イメージが膨らんだら、「図画工作科ノート」で登場人物や場面を構成するものを描く試しのスケッチをした（図６）。すべての児童が、登場する人物などを何通りか描き、イメージに合うものを選ぶことができていた。

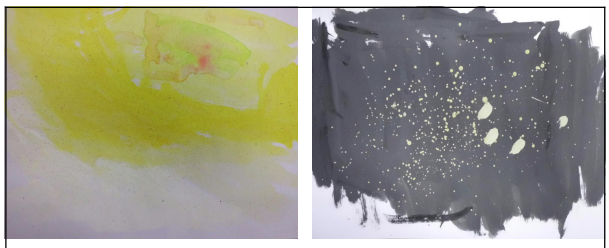
抽出児童Ａは、「雪わたり」の幻燈会の場面を描こうとし、場面の様子や主人公の気持ちを想像して、形や色で表現できた。「気持ちを表す形や色」での学習を通して、今までに積み重ねてきた「みっけタネ」の発想のプロセスや「図画工作科ノート」の作品を振り返りながら、図７ア のように幻燈会の「楽しさ」や図７ イ のように「夜の森のイメージ」を自分らしい形や色で表現することができた。

抽出児童Ｂは、題材「気持ちを表す形や色」での友達の作品を鑑賞するうちに、抽象的な形や色で気持ちを表現できるようになってきた。幻燈会での主人公の「楽しい気持ち」を図８ ア のように黄色を主張色として、筆やブラシを使って表現したり、図８ イ のように冬の森の「幻想的なイメージ」を絵の具を滲ませて表現したりできた。

(2)　考察

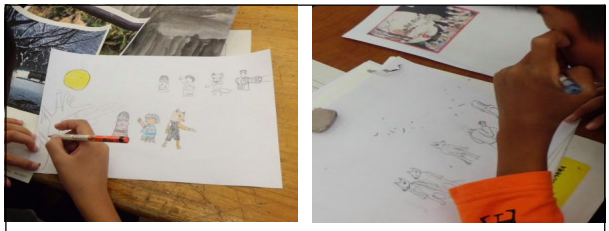
「グローアップチャート『みっけタネ』」についてのアンケート結果（図９）には、「みっけタネ」が「とても参考になった」「まあまあ参考になった」が合わせて９割以上見られた。児童は、「みっけタネ」を発想する場面で積極的に活用していたことが分かる。具体的にどの記述が参考になったかというと、「絵や写真、図」「吹き出しの説明やヒント」

「発想や構想の仕方」「振り返ることができる」などの回答が見られた（図10）。



【絵の具を滲ませて表した】　【絵の具を飛ばして表した】

図５　主張色で表したイメージ



【登場人物を描く様子】　【複数の動きを考えて

図６　登場人物や場面を構成するもの

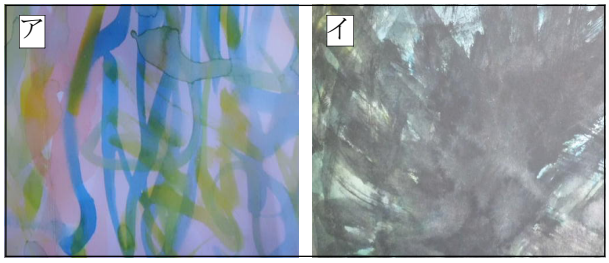


図７　抽出児童Aが描いたイメージ

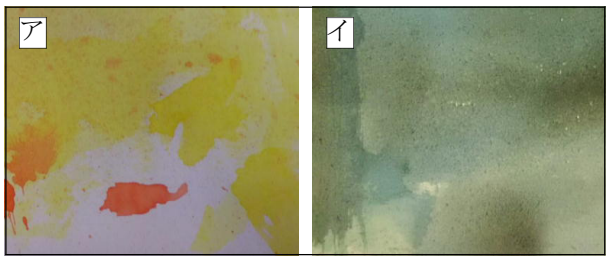


図８　抽出児童Bが描いたイメージ

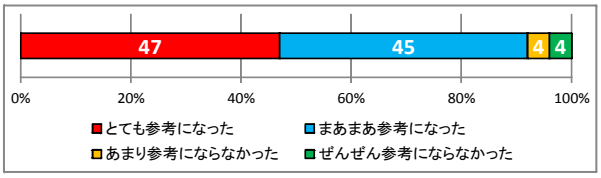


図９「みっけタネ」の活用にかかわる児童の意識

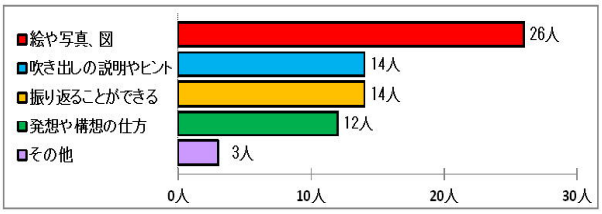


図10「みっけタネ」の参考内容にかかわる児童の意見（69人回答）

「図画工作科ノート」についてのアンケート結果（図11）には、「図画工作科ノート」が「とても役立った」「まあまあ役立った」が合わせて９割以上見られた。児童は、「図画工作科ノート」を発想する場面で積極的に活用していたことが分かる。具体的に何が参考になったかというと、「イメージを試すことができる」、「前に描いたものを見直せる」「取り外して自由に使える」などの回答が見られた（図12）。イメージを膨らませる段階では、「みっけタネ」で鑑賞や発想の視点やプロセスを、分かりやすい絵や写真、図などを使って示した。また、それらのどこに着目したらよいか、矢印などで具体的に指し示し、吹き出しで説明したり、ヒントを与えたりした。「絵や写真、図」などの提示や「吹き出しのヒントや説明」が参考になったというアンケートの結果（図10）からも分かるように、常に「みっけタネ」から多様な視覚的な情報を得たり、イメージを膨らませるためのプロセスを知ったりしたことで、発想のきっかけをつかむことができたと考えられる。また、「イメージを試すことができる」ことが役立ったというアンケートの結果（図12）からも分かるように、「図画工作科ノート」を用いた試し活動で、毛糸やビーズなどの材料を並べたり、並べ直したり、ノートを何枚も使って描いたり、描き直したりすることを繰り返すことによって、頭に思い描いたイメージを具現化することができた。さらに、「図画工作科ノート」にイメージを積み重ねてくことによって、今までの発想をふまえた新たな発想を広げることができたと考えられる。一方、「図画工作科ノート」の始めのページに「みっけタネ」を綴じておい たので、両者の区別がつかなくなってしまった児童がいたことも、アンケート(図12)の「その他」の記述から分かった。

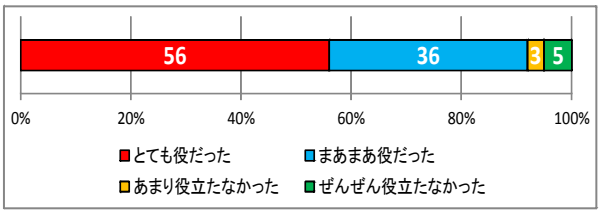


図11「図画工作科ノート」の活用に関わる児童の意識

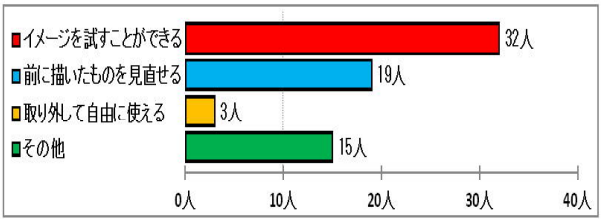


図12「図画工作科ノート」の参考内容に関わる児童の意見（69人回答）

以上のように、視覚的な情報やヒントを基に、様々な試し活動をしたことが、自分らしい表現を追求しながら、発想する力を高めるのに有効に働いたと考えられる。

２　イメージを練り上げる段階での「グローアップチャート『みっけタネ』」と「図画工作科ノート」を取り入れた活動の有効性について

(1)　結果

①　実践１　題材「気持ちを表す形や色」

始めに、「みっけタネ③」を参考に、イメージを膨らませる段階で製作した作品を振り返り、どんな形や色を使えば気持ちを表せるか確認した。さらに、友達との相互鑑賞で意見交換し、多様なとらえ方を知り、イメージを広げていった。

【筆で描く様子】　【指で描く様子】

図13　絵の具で描いたイメージと製作の様子

次に、「みっけタネ④」を参考に、毛糸やビーズの代わりに絵の具に限定し、表したい気持ちを絵の具の特性を生かして意図的に表現した。児童は、筆と絵の具を用いることで、思い思いの太さの線や色で表していた。材料を並べるより、絵の具と筆で描く方が自由度があると感じ、児童はのびのびと表現していた。短い時間でも一人３枚程度は製作し、「図画工作科ノート」のすべてのページを使い切ってしまった児童もいた。イメージを膨らませる段階での経験を生かして、ほとんどの児童は絵の具と筆で自分らしい表現を試し、中には指で描き始めた児童も見られた（図13）。

図14　抽出児童Aの作品

抽出児童Ａは、前段階では、なかなか自分の意図する表現ができなかったが、「みっけタネ」の発想のプロセスや「図画工作科ノート」の試し活動を振り返りながら、イメージを形にできてきた。色の組合せや線の動きを考えながら、絵の具と筆で表したい気持ちを意図的に表現することができるようになり、図14の作品以外にも数通りの作品を製作することができた。

抽出児童Ｂは、「爽やかな感じ」を風景という具体物でしか表現できなかったが、「図画工作科ノート」のページをすべて使い切ってしまうほど、何回も試し活動を行い、図15のように「爽やかさ」を構成する要素を形や色で分解、再構築して、具体物にとらわれることなく形や色で表現できた。

図15　抽出児童Ｂの作品

②　実践２　題材「想ぞうのつばさを広げて」

「みっけタネ③」を参考にイメージを膨らませる段階での学習を振り返り、相互鑑賞で発想を広げた上で、「みっけタネ④」を参考に、表現したい場面の画面構成を考えた。構成には数枚の主張色で表した背景と、イメージを膨らませる段階で描いた登場人物などのスケッチを用いて、それらを切り取って組み合わせていった。児童は、人物の配置、背景、奥行き、バランスなどを考え、「図画工作科ノート」に綴じてある今までのアイデアを見直しながら並べたり並べ直したりしていた（図16）。自分が気に入った画面ができたら、各自がデジタルカメラで記録し、イメージに一番近い組合せを見付け出すことができた。画面構成ができあがったら、画用紙に下描きをし、アイデアスケッチを基に、心情や雰囲気をイメージしながら彩色する活動を行った。下描きができ上がっても、新たな発想を生かしていけるよう彩色しながら再度構成を考え直したり、描き足したりしながら、画面を形づくっていった。

【楽しい幻燈会】　【狐に出会って驚いた】

図16　画面構成したイメージ

抽出児童Ａは、「気持ちを表す形や色」の実践を思い出し、色によって気持ちを表すことが円滑にできていた。また、イメージを膨らませる段階で作成したいくつかのイメージを組み合わせて、自分の意図を意識しながら表現することができた。一方、人物の表情や手足の動き、各部のバランスなどを、的確に表現することに戸惑っている様子も見られた。

抽出児童Ｂは、「楽しい気持ち」と「森の幻想的なイメージ」を「みっけタネ」の「色の組合せや色の効果」「人物の配置や動き、重なり」「奥行きや方向感」などの記述を参考にし、「図画工作科ノート」で人物と背景を組み合わせたりしながらイメージを練り上げることができた。幻燈会の「楽しいイメージ」を鮮やかな色や登場人物と取り囲むきつねたちで表し、冬の森の「幻想的なイメージ」を背景の青で表し、自分の意図を描き表すことができた。

(2)　考察

次項、図17の製作過程にあるように、見たままを下描きして、その線にそって実物通りに色を塗っていくという、児童のこれまでの考え方に変化が見られた。図17の作品は、まず「楽しい気持ち」を橙色で彩色し、「不安な気持ち」を紫色で彩色し、さらに「冬の森の雰囲気」をどう表そうか試行錯誤し、形や色で主人公の気持ちを表そうと工夫していた。「雪わたり」の場面は一面の雪景色であるので、白や青の画一的な表現になりがちであるが、児童は何回も塗り重ねたり、描き直したりしながら、自分らしい形や色で、重厚感のある作品を製作していった。始めは、雪景色を橙や赤で表すことに抵抗感があった児童も見られたが、もっと表現は多様なものであり、自由に表現してよいということに気付くことができた。そのため、色を１回塗って終わりでなく、絵の具の濃さを調整しながら上から色を何回も塗り重ねたり、またその上に線を描いたり、さらにその上に塗ったりしながら仕上げていく様子も見られ、常に感性を働かせながら製作することができたことが分かる。

児童の考えに変化が見られた要因としては、「みっけタネ」で構想の視点やプロセスを、分かりやすい絵や写真、図などを使って示し、それらのどこに着目したらよいか、矢印などで具体的に指し示し、吹き出しで説明したり、ヒントを与えたりしたことが挙げられる。具体的には「色の組合せや効果」や「人物の配置や動き、重なり」「奥行きや方向感」などを視点として、それらと照らし合わせて意図する表現に近付けるまでのプロセスを示したことによって、児童は、常に「みっけタネ」から多様な視覚的な情報を得たり、イメージを練り上げるためのプロセスを知り、構想に生かすことができたと考えられる。さらに構想の時間を十分にとり、「図画工作科ノート」を用いた試し活動で、絵の具と筆で思い思いの表現を試したり、今までに製作した数枚の主張色で表した背景と、前回描いた登場人物などのスケッチを用いて、それらを切り取って組み合わせたり並べたりするなどの操作を繰り返したことで、自分の意図する表現に近付けることができたと考えられる。しかし、製作を進める中で、気持ちを表す人物の動きが描けずに戸惑っている児童も見られた。高められた発想や構想を思いに合わせて表現できるように、創造的な技能面を高めるような工夫が必要であった。

【喜びをメージした配色】　【お団子を食べた時の喜びを、試し活動でイメージした橙色で表した】　【食べようか？という迷いと、冬の森のイメージを心情豊かに表した】

図17　気持ちを表現した作品の製作過程

以上のように、視覚的な情報やヒントを基に、様々な試し活動をしたことが、自分らしい表現を追求しながら、構想する力を高めるのに有効に働いたと考えられる。

Ⅶ　研究のまとめ

1　成果

○　「みっけタネ」を使うことにより、参考作品を鑑賞する視点や方法、思いを形にするための発想や構想の視点や方法を、視覚的な資料や吹き出しの説明を意識しながら活動でき、漠然と鑑賞したり製作したりすることなく、明確な意図をもって表現できるようになり、自分らしい表現を追求しながら発想や構想する力を高めることができた。

○　「図画工作科ノート」を使い、発想や構想の時間と試し活動の場を十分に取ったため、見たものを写すだけの表現や、下描きのあとに彩色するだけの表現ではなく、登場人物の気持ちや作品の雰囲気を、自分の思いを込め常に感性を働かせながら描いたり描き直したりして作品を製作できるようになり、自分らしい表現を追求しながら発想や構想する力を高めることができた。

2　課題

○　「みっけタネ」と「図画工作科ノート」の役割の違いを認識させるとともに、「みっけタネ」と「図画工作科ノート」を浸透させ、より主体的な造形活動ができるように継続して指導していく必要がある。

○　高められた発想や構想を思いに合わせて表現できるように、創造的な技能面に関する「みっけタネ」を作成し「図画工作科ノート」の活用を考えていく必要がある。

＜参考文献＞

・藤江　充　他　監修　『形・色・イメージ＋これからの図画工作』　日本文教出版(2009)
・『形　forume』　日本文教出版(2010)

（担当指導主事　細矢　瑞左）